

会議記録

会議名称	第4回 杉並区基本構想審議会「第3部会」
日時	令和2年12月14日（月）午後5時59分～午後8時07分
場所	中棟5階 第3・第4委員会室
出席者	委員 大竹、牧野、泉、裕尾、本郷、山ノ内、富田、岩田、西山、本城区側 子ども家庭部長、教育委員会事務局次長、教育政策担当部長、地域活性化担当部長、済美教育センター所長、企画課長、文化・交流課長、子ども家庭部管理課長、児童青少年課長、教育委員会事務局庶務課長、企画調整担当係長
配付資料	○第3部会共通資料 資料20 令和2年度 杉並区の教育 資料21 杉並区教育ビジョン2012推進計画（令和元年度～3年度） 資料22 平成30年度杉並区教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（平成29年度分）報告書 資料23 令和元年度杉並区教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（平成30年度分）報告書 資料24 令和2年度杉並区教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（令和元年度分）報告書 資料25 部会データブック【学び】 資料26 学校運営協議会の状況 資料27 学校支援本部 主な活動内容 資料28 土曜日学校・放課後子ども教室、学校サポーター・学生ボランティア、部活動活性化・部活動指導員の令和元（2019）年度活動実績 資料29 杉並区の学校開放の概要 資料30 杉並区の学校開放 資料31 子どもたちの生涯学習活動への参加ー社会教育機関における事例と実績ー 資料32 子どもたちの通塾率 資料33 いじめ・不登校などの認知件数について 資料34 小・中学校で学年横断で活動している例 資料35 区内小学生、中学生の基礎体力年代推移と都、国との比較 資料36 小中学校における主な特別活動一覧 資料37 指導教授制について 資料38 様式2-2 まとめ補助シート<文化・スポーツ分野>【当日配付】

	<p>○全部会共通資料 ※基本構想審議会で配付済み 資料19 様式2-1まとめシート 資料20-5 現基本構想（10年ビジョン）に基づく取組の進捗状況 （目標5）人を育み共につながる心豊かなまち</p>
会議次第	<p>1 開会 2 議事 【テーマ：学び】 3 今後のスケジュールについて 4 閉会</p>
傍聴者	1名
会議の結果	<p>個別テーマ【学び】について、区が提示した資料等を踏まえ、委員間の 討議を行った。</p>

○部会長 皆さん、こんばんは。少し早いのですが、ただいまから杉並区基本構想審議会第3部会の第4回の審議を開始したいと思います。

本日は10名が出席で、欠席はタケカワ委員1名となっております。委員の出席は過半数を超えておりますので、本会が有効に成立していることを報告いたします。

これから議事に入ります前に、本日使用する資料と会議の全体のあらましについて、あらかじめ皆さんと共有したいと思いますので、事務局から説明をお願いいたします。

○教育委員会事務局次長 はい。部会の事務局のサブリーダーをしています教育委員会事務局次長の田中から、本日の議論に先立って、配付資料と議事内容について簡潔にご説明をさせていただきます。申し訳ありませんが、座って説明をさせていただきます。

まず、配付資料の説明ですが、委員の皆様にも事前にお送りした資料でございますけれども、本日の部会テーマ「学び」に関連して、まずは杉並区の教育行政を全体的に俯瞰していただく資料として、資料ナンバー20の「令和2年度杉並区の教育」です。それから、資料ナンバー21、「杉並区教育ビジョン2012推進計画」。これは現在の推進計画ですけれども、この二つをお配りしてございます。

それから、これまでの区の実施に関する評価に関する資料といたしまして、資料ナンバー22から24、杉並区の教育の点検・評価報告書の直近3か年分、これをお配りしております。

そして、資料ナンバー25、学びに関するデータブック。

資料ナンバー26から37につきましては、委員の皆様から追加資料のご要望を頂いたものを用意してございます。これらの資料の説明につきましては、時間の関係もありますので割愛させていただきますが、ご審議を進めていただく上でご不明な点等がございましたら、事務局までお問い合わせを頂ければと思います。

続いて、本日席上に配付した資料でございますが、資料ナンバー38番、これは前回ご審議いただいた文化・スポーツ分野に関する様式2-2のまとめ補助シートになります。前回の部会でご議論いただいた内容を確認するため、A欄からC欄に再整理をし、このシートに落とし込んだものでございます。

これまでもご説明してきましたとおり、最終的には様式2-1まとめシートというものを作成して、12月21日、次回予定している第5回の部会でご確認いただくこととなりますので、議論が不足している点などありましたら、今回関連する事項についてご発言いただければと思います。

次に、本日の議事内容でございますけれども、第4回のテーマは「学び」でございます。現在の杉並区の総合計画、実行計画における施策というものが五つほどあります。

施策の25からが教育分野になりますが、施策25が「生涯の基盤を育む質の高い教育の推進」というテーマになっています。それから、施策26が「成長・発達に応じたきめ細かな教育の推進」。そして、施策27が「学校教育環境の整備・充実」で、ハード系のもの。

施策28が「地域と共にある学校づくり」ということでございます。それから次に、施策29「学びとスポーツで世代をつなぐ豊かな地域づくり」というテーマがあるんですが、この部分のスポーツ以外の部分についてという整理になりますけれども、次の10年間を見据え、学び、教育に関することについて幅広くご審議いただければと思っております。

また、本日の到達点としましては、これまでと同様に、「学び」をテーマにご審議していただき、共通様式2-1のまとめシートに整理をしていただくこととなります。この到達点に向けてご審議を、本日頂ければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局からの説明は、以上でございます。

○部会長 はい。ありがとうございました。

本日の会議終了は8時を目途としておりますけれども、審議の状況によっては30分程度延長することもあるかもしれません。ご協力いただければと思います。

それでは、議事に入りたいと思います。

ただいま事務局から説明がありましたとおり、今回も部会に与えられたミッションである様式2-1まとめシートの作成を念頭に置きながら、審議を進めていきたいと思っております。

本日のテーマは「学び」です。本日はこのテーマについて議論していただきますが、このことに関連しまして、この基本構想の審議と並行しまして、杉並区教育振興基本計画審議会という審議会が設置されており、新たな杉並区教育ビジョンについての検討が進められております。実は、私と副部会長がその審議会の委員になっており、副部会長におかれましては、そちらの審議会の会長を務められております。教育ビジョンは、この基本構想と整合を図りながら検討を進めることになっておりますが、本日の議論を始めるに当たり、この件について副部会長から一言お願いできればと思いますので、よろしくお願いいたします。

○副部会長 はい。よろしくお願いいたします。今、部会長からお話がありましたので、本日のこの「学び」というテーマに関しまして、私から少しお話をさせていただきたいと思っております。

先ほどもお話がありましたように、今、基本構想の議論と並行しまして、教育振興基本

計画、いわゆる教育ビジョンの策定の議論を進めております。先ほどの資料21に推進計画が出されておりますけれども、現行のビジョンが来年度までですので、2022年度から新しいビジョンに切り替えていくということになっています。それに関連しまして、私から少しお話をさせていただきたいと思います。

まず、一昨日、このビジョンの策定に関わりまして教育シンポジウムが開かれまして、会場に、それからオンラインで約200名の区民の方々にご参加いただきました。そこで、様々な意見が出てきたのですが、今回、この時期にシンポジウムを行ったのは、策定の過程で多くの市民の方々や子どもたちの声を聞きたいということで、今回初めての試みですけれども、今まではビジョンができてから説明のためのシンポジウムを開かれていたのですが、今回初めて、策定の過程で、とくに策定の初期のところでシンポジウムを開いていただいて、多くの方々のご意見を頂きました。いろいろな手法を使って、たとえばツイッターなどいろいろなツールを用いて意見を頂きつつ、どんなことに区民の皆さんが関心を持っていらっしゃるのか、またはどんな教育のあり方を望んでいらっしゃるのかということをお聞きしたことになります。

現在、教育振興基本計画の策定会議での議論は、まだこれから具体的なないようにはいるろうとしているところです。しかも次回は24日のクリスマス・イブにまた会議があるという、ちょっと恐ろしいスケジュールになっているんですけれども、皆さんがとても熱心で、24日でいいのかと言ったら、皆さんよいとおっしゃるので、その日にさせていただいたのですが……。

「学び」について議論するにあたって、私から申し上げたいことの一つは、実は、3日前、このシンポジウムの前の日に、オンラインでエジプトの若者たちと議論をしていました。日本に留学していたエジプトの学生たちが、日本で公民館に触れて、アラブの春以降のエジプトにもこういうものが欲しいと言うので、エジプトに公民館を造ろうという動きが生まれたのですが、それを文科省の支援を受けて、今、運動を推進しているのです。

そのためのセミナーを開いてほしいと言うので、私が日本の公民館の話をしていたのですが、途中から若者論みたいな話になりまして、そこで彼らから訴えられたのが、「自分たちは実は、この社会に居場所がないのだ」という、日本の子どものようなことをなのです。それで、「君たちが言っているのは、空間とか物理的な居場所がないのか？」と聞きましたら、「いや、そうではない」と。自分がきちんと社会に位置づいているという感覚が持てないですとか、受け入れられていると思えないとか、自分が社会のどんな役に立つ

のかといったことがどうも見えてこない、その意味で、自分は社会にとってどのような存在で、どのような意味があるのかがわからず、そのことを問い始めていると言うのです。

今、世界的になのかかもしれませんが、若者たちの居場所がないというのか、社会がどんどん変わっていく中で、自分が社会とどういう関わりを持って生きているのかといった実感が湧かないというように感じる傾向が、どうも強くなっているのではないかという印象をそこで受けました。私はエジプトについて全く知らなかったものですから、ちょっと驚いたのですが、実はそういうことが、今回の新教育ビジョンの大きな底流といたしますか、テーマになっているのだろうと考えています。

今回の新たな教育ビジョンを策定するに当たっての大きな社会的な背景は何かといいますと、一つは、一昨日のシンポジウムでも申し上げたのですが、人生100年時代がやってきていて、今の子どもたちは、予測平均寿命ではもう100歳を超える時間を生きることになっているということです。それに対して、学校教育は、その初期の頃のせいぜい20年間ぐらいにしか関わっていない。その後の80年間をどう生き抜くのかといったことも含めて、100年生きる力をつけていかななくてははいけない。しかし、また後ほど申し上げるかと思いますが、今日のこの人工知能が急速に発達している中で、2030年には、その頃の大学卒業生の65%が今ない仕事に就くと言われてたり、今ある仕事の半分が自動化されて人を雇わなくなるような時代がやってくると言われてたりしています。そのような時代の中で、私たちおとなは、「どんな人生を生きなさい」と子どもたちに言えるのかが、まず問われているということです。

それから二つ目としましては、やはり、格差がどんどん広がっているという問題があります。特に子どもの貧困問題は、杉並区は多分豊かな地域だと思えますが、それでも見逃せない問題としてあるのだと思えますし、さらにはこれから彼らが出ていく社会は、格差がさらに広がっていく社会でもあるだろうと思えます。当然、これはお金を回さなければいけないということもありますが、反面でやはり、自分で、または仲間と一緒に、その状態を変えていけること、変えていこうとする気持ちが持てるということも大事ではないかということなのです。さらに、様々な問題がこれから起こるだろうと思えます。今、私たちは未来の予測がつかない時代に入っているということでもあります。

その意味では、例えばビジョンをつくるときに、これまでは、私たちは子どもたちに対して、従来はこうあってほしいという子ども像を描いて、それに対して何ができるのか、どうしたらいいのかという策定の仕方をしてきました。それは言い方を変えると、バック

キャストといいますけども、先に目的や目標を置いた上で、逆算するかのようにして、今何すべきかということを確認にして、計画を立てるというやり方です。つまり、未来の目標達成のために、今年やるべきこと、来年やるべきことという形で計画を決めるという手法を取ってきたのですが、どうもそれが機能しなくなっているのではないかということなのです。子どもたちにあるべき姿を、私たちが押しつけるという形ではなくて、子どもたちが自分で、この社会を変えていけるですとか、自分で自分の人生を作っていけるですとか、または自分で、しっかりと人生を設計をして、それが駄目なら、またやり直しができるのだと思うことができ、自分なりの人生をきちんと生きられるようにするにはどうしたらよいかといったことを基本に考えて、大人に何ができるのかを問いましょうということになっています。

ここでは、いわゆる健全な子たちだけではなくて、障害を持った子たちですとか、さらにLGBTですとか、今やSOGI「ソジ（ソギ）」と呼ばれる人たちも含めた多様性を尊重する社会の中で、子どもたちがどういう人生を選択し、つくり、生きていくのか、またはそれを組み替えて生きていくのかということ、私たち大人がどう支援できるのかという観点から、教育ビジョンをつくりませんかという話に、今のところなっています。

さらに、もう少し言うておかななくてはいけないのは、この社会は今、多様性とか、ダイバーシティーとか、インクルージョンと言いながら、実は、ダイバーシティーとインクルージョンと言った途端に、それは多様性ではなくなってしまう、ある尺度で多様性や個性を測ってしまって、縦の序列に組み替えて、包摂してしまうような動きがとても強い社会になってしまっているということです。

つまり、今、子どもたちが非常につらいのは、個性だと言われながら、個性が評価されて、序列化されてしまうので、全人格的に「おまえは駄目なのだ」と言われかねないような社会になってしまっているということなのです。それでは、子どもたちには、自分で生き抜こうとする力がつかないし、そういう思いは持てないだろうという議論になっています。こういうことも含めて、子どもたちのために、私たちがどんな社会をつくるのか、大人は子どもに何ができるのかということも含めて、教育ビジョンを考えましょうということになっています。

重い話になってしまいましたけれども、以上のことを含めて、今日は「学び」ということで、議論をお願いできればと思っています。

ありがとうございます。

○部会長 はい。どうも、副部会長、ありがとうございます。

それでは、改めて議事に入っていきたいと思うんですが、先ほど申し上げましたように、本日もお手元の様式2-1を完成することを念頭にして、これに沿って審議を進めていきたいというふうに思っています。

副部会長のお話を伺うと、もう、我々が今まで経験してきた社会ではなく、全く新しい社会が待っている。そこに向けて、私たち大人が子どもたちに何ができるのかというような、そんなところを考えながら、それぞれのお立場からご発言をしていただければと思っています。また、多くの方々にご発言していただきたいと思いますので、発言は簡潔にお願いできればと思います。

それでは、どなたからでも結構です。いかがでしょうか。

副部会長、先ほど紹介があった12日に、そこで、子どもたちからどんな意見がでたとか、どうだったんでしょうかね。

○副部会長 はい。すみません。子どもたちからはまだ直接、声を聞けていないのです。

ですが、この教育ビジョンを策定するのに、現在、子どもたち向けのアンケートを今、ネット上、オンライン上でなされていますので、次回の審議会には出てくると思います。ですので、まだ、子どもの声は少しご紹介し難いのです。

ただ、たとえば一昨日シンポジウムでの議論ですと、私がいま申し上げたようなことをお話しし、その後、NPOカタリバの今村さんがコーディネーターをしてくださって、カタリバの皆さんにもお手伝いいただいて、少しグループ討議をしたのです。そこで、区民の方々に、「子どもたちにどんなことを学んでほしいですか」という問いかけて、出てきた言葉、とくにキーワードを集めていって、メンチメーターという、キーワードの出現頻度を示すサービスがあるのですが、それを使ってみると、例えば、「わくわく感を持ってほしい」、「生きる力をつけてほしい」、それから「学び合うという関係をつくってほしい」ですとか、または、「自信を持ってほしい」ですとか、「対話をしてほしい」ですとか、「多様性が大事である」とか、そういう言葉が保護者の方々や参加された先生方からはたくさん出てきています。

さらにもう一つ、「10年後どのようなまちにしたいですか」と問いますと、「つながりが大事で、人がつながっているまちにしたい」ですとか、「コミュニケーションが活発なまち」ですとか、「声かけができる」ですとか、さらには、「子どもの笑顔があふれるまちにしたい」とか、「健康であることです」とかという言葉が出てきています。それと、

子どもたちに、「もしあなたが校長先生だったら、どんな学校をつくりたいですか」と問いますと、これは数はあまり多くなかったのですが、例えば「子どもも大人も対話ができる学校」であったり、「子どもの笑顔があふれる学校」であったり、それから「先生も地域の人もいろんな人がよく話を聞く」ですとか、「大人も子どもも人生の舞台となるような学校が欲しい」ですとか、さらには、今の学校にないもので、「はちゃめちゃな学校がいい」とか、そういう話も出てきています。

これは私自身の受け止めでもあるのですが、今のこの社会のあり方に対して、親御さん、または区民の方々や学校の先生方が、ある種の、自分でも目に見えない何か不安みたいなものを感じていらっしゃるのと同時に、不安だからこそかもしれないが、やはり、つながってみたいとか、誰かとコミュニケーションを取りたいと思っている。それは裏返せば、孤立しているということの現れなのかもしれないと、受け止めていました。

そうしたことは、やはり子どもたちの気持ちや考えにも反映をしていくでしょうし、もっと言えば、子ども自身が大人との関係の中で、信頼感を持って自分がきちんと認められているという関係をつくれないうし、感じ取れないということであるとすると、子どもも孤立してしまっているのではないかと。または、誰かに語りかけても、大人に話をしても、自分のことを分かってもらえないという感覚を抱え込んでしまっているのではないかと。そうすると、やはり、この社会というのは生きづらいのではないかと。学校でも認められていないし、社会に出ても認められていないのではないかと。どこに行っても、結局大人というのは自分たちを評価しているのではないかと、というような、そういう受け止めになってしまっているとすると、かなりつらいな、という印象を持ったということなのです。以上です。

○部会長 ありがとうございました。

どうですかね。今後、文科省あたりから出ているのは、子どもたちの言葉、言語と、あと体験というようなことがすごくキーワードとして大事だというようなことがあり、どうしたら、そういった言語で自分の意思も伝えられながら、そしてそういったものと、あと体験というようなところ。やはり子どもたちの成長、発達で体験をしていくというような、私は以前から五感でという話もしていますが、そういう体験を通じて、子どもたちが何かを学び取るという。あと、既存の学校というものが、今後、今のままではもうどうしようもないというような状況にも来ているのではないかと。本当に、学校は何を求められていくのか。そして、今、一方では地域の中ではキーだと思ってるんですね。その学校をどう生かしていくかというところが、地域の中ではすごく大事になっていくと。

今日は「学び」ということですから、スポーツ、文化も全て、この「学び」というのが基本に、ベースになって、全てに共通している私たちのテーマのところは、今回のこの「学び」というものが全ての会議に共通するベースになっているところではないかなと、全てに通じていくところだと思っているんですね。ですから、どんな切り口でも行けるのではないかと思うんですが。副部長からのお話を伺い、そして自分自身が今ある中で、こんなことが課題としてあり、10年後にはこんなような社会になっていくときに、私たちが10年後に向かって、今何が考えられるのか、できるのか。そんなところで、何か、それぞれ気づくこと、気になっているところ、こうあってほしいというような、どんな切り口でもいいと思うんですが、お話しただければと思うんですけど。委員、目が合ってしまうですね。

○委員 はい。では、失礼いたしますが、副部長、お話ありがとうございました。教育という言葉はとても重い言葉で、教え育てるという意味であると思いますが、学校教育となるとどうしても目標としては、高校に進学する、大学に進学するといった学問での学びというものに重点が置かれてしまうのではないかと思うんですね。そこには、やはり序列というものがあって、特に、偏差値のような数値で序列をつくるのがものすごく定番化しているもので、それが本当に、極端に強い国だと思うんですね、この国は。

数字で、ここはいい大学とか、ここは悪い大学みたいな、もうそんなことはヨーロッパであり得ないので、それをものすごく数値化してしまっていて、それに合わせて教育というものであったりとか、個性というものを数値化しようとしてしまう習性に陥ってしまっていると感じています。

私の娘たちもちょうど中2の14歳のときに日本に戻ってきて、日本語が全然できない中で高校受験をしなければいけなくて、苦労しました。そういったときも、やはり日本の社会では、日本語ができないと、知的障害者みたいな扱いも受けました。だから、何というか、どうも、人そのものの個性というよりは、どの高校に入れる学力を持っているかというのが基準になっているのではないかな、教育の目標にもなっているのではないかなと見えています。

それは、人生100年時代においては、あってはいけない数値化なので、今後は取り除いていかなければならない、柔軟な対応をしていかなければいけないのであろうと、シンポジウムでも出たように、子どもたちが自信を持って何とか自分で生き抜いていけるだろうという自信を持って生きていくためには、やはり大人がこうやってやるんだよというのを

見せないと駄目ですね。私は、例えば「家政科を出ているんだけど、女優になろうとして、でも駄目だった」、「女優としては成功しなかったけれど、声優として成功しましたよー」とか、「お父さんは、この会社は駄目だったけど、こっちの会社でこういう形で新しい仕事を見つけたよ」とか、そういった形で親や周りの大人が見せていくということが、まず、子どもの自信を取り戻す方法なのではないかなと思います。

○部会長 ありがとうございます。副部会長も前回話したときに、人生100年で、大学は22歳で終わって、後の80年がまだある中で、本当に22年で終わっていいのか。大卒でそれで終わりではなくて、やはり学び直しとか、ある時期のところで、60になっても、もしかしたら80でも学び直しというような、そういうような機会が提供されていくということも求められてきているのかなと。どうしても我々は、もう22で卒業すると、そして就職すると、もうそのまま企業で働いて、そして老後をどうするかというようなところだけでも、しかし先ほどから100年という数字を考えたときに、22、3歳で終わってしまって、それで学びがないというのではなくて、もう一度学び直しができたり、やり直しができる、そういう社会が求められて、一度失敗したらもう駄目ではなくて、失敗してもまた別の道が、また再チャレンジできるとか、そんなところがあるといいのかなという気はするんですけども。

一方で、副部会長も前にお話ししたときに、教育改革はしているけども、偏差値を打破しようというけども、しかし東京大学はそのまま残っているしという。ですから、もう根本的な全体が変わっているわけじゃなくて、偏差値教育とか、そこが残ったままで変えていきましょうというようなところになっているので……

○委員 それが矛盾なので。

○部会長 そこが矛盾しているねというところで、そうするとどうしてもそこを目指していくというようなところがあり、ですね。

はい、どうぞ、お願いします。

○委員 はい。副部会長への質問になってしまうかもしれないんですけど、僕自身の経験に基づくと、主体性を持って生きるということが、結果的に何段か上っていった先に、どうにかして自分のことを分かって、理解して見つけたその主体性を社会で生かしていくためには、評価をどこかで勝ち取らなければならない気がするんですよね。

もう少し具体的にお話しすると、主体性を持って僕自身は生きてきたつもりなんですけれども、自分で起業をしたりとかするという、そういった道のりを発見していくときに、

やはり自分にしかできないこととか、すべきことを見つける、社会の中で課題を見つけていくといったときに、では、その中で自分は、自分にしかできないこと、他者と差別化はどうしたらできるのかなというときに、やはりどうしても他者と比べるとか、そういった能力も必要になってきて。それをどう打ち出していくかというところで評価を勝ち取って、そしてお金になるという経験をこれまでしてきたんですね。ですので、何か究極的に主体性を持って生きるとなると、自分の必要だと思えるものを何か社会の中で見つけ出して、それでお金を得て食べていけるというところに行くのかなというのが僕自身の経験だとそうなんですけれども。そうなってくると、評価、やはり評価が必要なのかなとか考えちゃうんですけど、どう思いますか。

○部会長 副部会長、すみません。

○副部会長 はい。おっしゃることはよく分かるのです。評価も必要だという議論であればそうなのです。変な話をしますけども、それは、強い個人を前提にしてはいないか、という議論も当然あり得るわけです。そうすると、評価の問題をそのままにしておくことは、そうなれない(強くあれない)子たちは、では、そうならなくてもよい、と言ってしまうことにもなるのではないかということでもあるように思うのです。その意味では、強くあれる人はそうであればいいのだと思いますが、むしろ、一人も取り残さないとか、またみんなが新しい社会をつくりましょうというときに、いや、そうじゃない人々はもうそれでいいよと言ってしまうのかどうか、ということが問われているのだと思うのです。

その意味では、今までの社会というのは、みんなが同じ方向を向いていて、そしてみんなが同じように競争することで、規模とくに経済の規模が大きくなっていくので、その結果、パイが大きくなっていった、分配の割合は変わらなくても分配の量が増える、つまりパイが大きくなるので、一人一人の取り分の割合が変わらなくても、量は増えていくわけです、もらえる量は。そういうことの中で、人々が満足を感じていた時代があったのですが、もう、そうではなくなってきた、縮小する社会に入っていて、むしろ量ではなくて質が問われてくる社会において、それぞれが違っているということを前提で、しかしそれでも比べなければいけないとは、一体どういうことなのか、つまり何を比べるのかということになってしまうのではないかということなのです。

評価というのは、ある基準なり、尺度なりがあって、それでその人の位置を決めることが評価としてあるわけですから、今おっしゃったように違いがあって、それで自分が採用されるということは、他の人よりも優れていると思われるということであったりとか、ま

たは人よりも優位に立っているという形で、それは本来的に違っているのに、実は尺度化されて、序列化されているわけです。では、その評価で勝ってお金をもらえるということは、負けた人はお金をもらえなくてもよいという話をしているのと同じことになってしまわないかということが、今問われているのです。その意味では、そうではないあり方といえますか、競争して勝てる人々はそれでいいかもしれないけれども、そうではない人たちが、それでもやはりこの社会に生きていて、新しい価値を創り出して、自分の人生をきちんと歩めるようにしていくには、どうしたらいいのか、といったことを言わなければいけなくなっているのではないかということなのです。

その意味では、評価のあり方とか、もしかしたらその概念や感覚も変えなくてはいけな
いのかもしいかなと思うということです。難しい話ですけども。

○委員 例えば、100人、ユーチューバーになりたい子どもがいて、みんながユーチューバーになれる社会というよりかは、結果としてユーチューバーになれなくても、自分で幸せを、ほかの幸せをどんどんどんどん見つけていけるような社会が幸せな社会というイメージですかね。ここで言うならば。

○副部長 みんながユーチューバーになりたかったのだけれども、1人しかなれない。これと似ている話で、よく言われるのは、例えばJリーガーになりたいのだけれど、チームから始まっていくと、大体1,000人に1人とか、1万人に1人しか、Jリーガーになれないわけです。その子たちが途中で、Jリーガーになれないと、おまえは駄目な人間だと言われてしまうかという、今の仕組みだと多分そうなのです。そうではなくて、サッカーをやってきたといったことと、何かがうまく共鳴し合って、違う道が見えてくる、Jリーガーにはなっていないけれども、サッカーを通して何かができているのですとか、そういう多様な道を自分でつくれるような社会を、まず基本的に考えたらどうかということだろうと思うのです。

今までは、方向が決まっていて、例えばJリーガーになるのにみんなが競争することによって、社会が発展したりとか、大きくなったりとか、途中で脱落していても、それなりに、食べられたということがあったのかもしないのですが、今はもうそうではなくなってきているところで、むしろ、みんながJリーガーを目指していたのだけれども、またはユーチューバーになりたいと思っていたのだけれども、その子たちがひとりで孤独に戦うのではなくて、いろんな人と交流する中で、あ、こっちの道もあるのだと気づくとか、または新しい個性を持ったユーチューバーが出てくるとか、そういうような形で、自分の

人生をつくったり、やり直しをしたり、方向転換したりできるようなことが、保障されているような社会のあり方を考えられないかということです。少し理想主義になるかもしれませんが。

○委員 ユーチューバーのアカウント数とかね、要するに広告がいかについたかみたいな、まあ、結果的に言ってみればそれは偏差値的なものであってね。ただ、やっぱりそうじゃない、落ちこぼれユーチューバーという言い方はどうか分からないけども、そこにある味わいであるとか誇りであるとか、そういったものに目を向けてあげる人がどれぐらいいるかとか、そういうような場をいかに作り出すかということが、大切なのかなと僕は思いますけど。

○委員 そうですね。今のお話を聞いていて、まさに同じことを思いました。落ちちゃった子どもたちに対して周囲がどういう目を向けるかというのも、一つ、そうだなというのは、おっしゃるとおり思ったことと。あとは、ユーチューバーだけとか、さっきで言うんだったらJリーガーだけが取りはやされるような社会ではなくて、そもそもJリーガーって、その人たち単一でかっこいいんじゃないでなくて、それを支えている人たちに、どれだけ様々な方たちによって支えられているのか、そういう支えている人たちのかっこよさをもうちよっとフォーカスできないかとか。何かもっと選択肢があるよというのを見せられる社会っていい社会だなと、今聞いていて思いました。

○委員 いいですか。

○部会長 はい。どうぞ。

○委員 今のお話を聞いていて、少し前ぐらいに流行った「勝ち組」、「負け組」というような言い方を少し思い出したんですけども。起業をしたりとか、一部上場であったりとか、有名なブランドであったりとか、そういった会社に入れた。そこに入るためにはいい大学を出れた。そういう人たちが勝ち組という言い方をして、二流、三流、四流、もしくは大学じゃなくて専門学校、高卒、中卒となると負け組。そういう負け組って、自分で、社会からのレッテルも貼られていて、それを自分で「俺ら負け組だよ」って、「勝ち組のやつらはいいな」みたいな、そういう話というのはよく周りで聞いていたなと思いますね。

それで、結果的に、できる人は、頑張れば頑張るほどできる。でも、できない人は、頑張っても結局できないみたいな、そういう負のスパイラルがあるんですけども、では、それが本当にその個人の責任なのかというところは当時もすごく議論されていて。やはり経

済的に大学に行けない子たちもいたし、塾に通えない子たちもいたし、そういう部分であつたりとか。本当に、僕なんて勉強してもすぐ忘れちゃうんで、大学受験なんて超大変だったですし、そういう能力の部分でもお金が稼げることが何か絶対な社会みたいな、そういうイメージって、すごく強くすりつけられてきたかなというふうに、45年——44年か、生きてきた中で思いましたけども。

ユーチューブの話でも、僕がたまに見るユーチューバーで、ただ単に河原に行って自然を、生えている草を解説してくれる、ちょっとおかしな男の子がいるんですけども、チャンネル登録なんて数百いるかどうかで、一つの動画なんて30人見ているかどうかなんですけど、それを見ると、僕はほっこりして、すごく楽しいんですよ。いいユーチューバーを見つけられたなとかって思うんですよ。なので、やっている人がすごく楽しそうなので、チャンネル登録が増えることを目指して頑張っているとは思いますが、きっとやることがすごく楽しいんだろうな。あとは、やはり、負け組だと言われていたような僕らが、どれだけ普通に生活をして、さらに大人になってからも一つ一つ学んでいけるのかというような、そういう置いていかれない社会というのが本当に必要なんだなというのは思いますね。今、議論を聞いていて思いました。

僕個人として、その教育という——日本の教育なのかな、について思うところは、いわゆる科学、理科についての学校教育というのが、すごく足りないんじゃないかなとよく思うんです。というのは、いろいろな商品が出回るんですけども、すごくうさんくさい、えせ科学的な、いろんな言葉がつながっていて、こんな効果があるとかと言うんだけど、普通に考えたらそれはあり得ないだろうというものにすごく多くの人たちがだまされてしまって、そこに消費者がお金を払ってしまうとかというような現象があつたりとか。

あとは、テレビで、「納豆は体にいい」と言われると、翌日からスーパーで納豆が消えたりとかするという。何というんですかね、自分で科学的に何かを判断するとか、科学の知識を使って何かを判断していくということがすごく苦手な人種なんじゃないかな、日本人は。それは、人種というよりもそういう教育しか受けてこれなかったんじゃないのかなと、すごく思うんですよ。なので、そういう自然科学とかが、例えば学校での実験とかもすごく少なくなってきたと聞きますし、杉並区ではカエルの解剖を小学校のときにやっていたというの、これ、すごいなあと思っていたら、模型に変わっちゃったんですよ。そういう、生の生物に関わる場所が少しずつ削られていったりとかというのは、すごく僕は気になっているところですね。

○部会長 どうぞ。はい。

○委員 今の委員の発言を聞いていて思ったのは、科学の知識とさっきおっしゃったと思うんですけども、それもそうだと思うんですけど、やはり情報リテラシーというものもかなり重要なのかなと思います。さっきの納豆の例で言うと、テレビでこういう情報を見たからそれをそのままのみにして、それで実際にその購買行動に走るというような、自分の中で、うのみにするんじゃないじゃなくて、1回それを解釈して考えるということがなかなかできていないのかなと思います。それは、納豆とかそういう話だけじゃなくて、例えば今の、これからの世の中で言うと、フェイクニュースとか、フェイクの動画とか、いろんなものがこれから出てくると言われる中で、そういった情報をうのみにするんじゃないじゃなくて、それを一度自分の中で消化できるような、そういうリテラシーの教育というものがいま一度必要になってくるんじゃないかなと思いました。

○委員 でも、昔からインチキなものはあったけどね。メディアがちょっと買ったという、ねえ、ネットの前から、変なインチキな露店とか、いっぱいあったんだけども。

だからそれは、やはり自分で考えるしかないですよ、うん。ただ、どうなのか、僕は少しましになっている感じもするんですよ。オイルショックのときにトイレットペーパーに群がったときよりは何か、早く考えるようになったのと、これは偽物だというような情報メディアもあの頃より増えたし。とは思ってはいるんですけどね。

それと、この「教育ビジョン」と掲げられているんだけど、これが何か、あんまり面白くないと言ったらあれかもしれない。「共に学び」みたいなので、僕の子どもの頃は—もうちょい後、70年代ぐらいからあんまりこういうビジョンとして掲げられるようなものというのは、あんまり変わってなくてね。もっと何か具体的なようなものがこういうところに提示されないと、あんまり意味がないのかなと、思ったんですよ。

どうしても抽象的なキーワードになっちゃうんですよ、ビジョンとして幾つかつくろうというときにはね。この辺がどうにかならないかなと思いましたね、これを読んで。

こういうのは、でも、どうやってつくられていくんですか、このビジョンに掲げる言葉というのは。

○委員 いいですか。今の質問の答えは、僕も聞いてみたいので、どうやってつくられるんですかというのは、聞いてみたいです。

○副部会長 これは、事務局の方にお願ひできればと思います。これは、私は関わっていませんでしたので、逃げるわけではありませんが、すみません。一般的には、審議しているの

を事務局でまとめていただいて、それを審議にかけて、委員の方々の了承を得てという形になるのですが、その後、だんだん薄まっていってしまうというのがありますね。

はい。事務局からお願いいたします。

○教育委員会事務局次長 では。作成の過程も含めて、8年前に、このビジョンはできましたけども、私は、そのときの作成担当の参事でした。現在の教育ビジョンも、大体同じような作り方なんですけども、今回の副部長のお立場のように、学識経験者とか学校の関係者とかPTAの方々とか、いろんな方々に委員として入っていただいて、何回か審議会をして、そのときの時代、時代のキーワードみたいなものというのは、あったのかなと思っています。これは平成23年に審議してつくってもらったんですけども、ちょうど東日本大震災3.11があって、そのときに多くの委員の皆さんの共通事項として、そこで人々の関わりとかつながりとか絆とかいうことは、やはりこれからの子どもたちもそうだし、大人たちもそうだし、人間が生きていく上での一番の大切な学びの方向性として、そういったものが必要というよう議論が根底にはあったと思います。

そのときの座長をしていただいた方が、学校教育というよりも社会教育分野の方で、社会教育委員の会長をされていた方なんですけども、人と人とのやり取りが希薄になっていて、そのやり取りの復活というのが、やはりこれからの社会の基本になっていくと、ある意味、教育の基本形として大切だというような、そんなキーワードがあったと記憶しています。

前回は人の絆とか関わりが、やはりこれから10年必要だろうということになったんですけども、今回で言うと、このコロナのこともあります、副部長から、人生100年とか学び直しとか、あるいは学び続けることとか、そういったキーワードが新ビジョンの審議会初回で出てきていますので、今回の審議会の委員の方々も、おそらくそういったところに共通事項を持っていくと、そういったことをもって、どうしても教育ビジョンって理念体系みたいなものですので、委員おっしゃるとおり、読んでもあまり面白くないかもしれませんが、ただ、一番の、本当に最大公約数で見るところで、前回の場合はいろんな議論がありましたけど、「共に学び共に支え共に創っていく」ということが、最大公約数のキーワードとして、委員の方々にまとめていただいたといったことで、この大きな基本理念の基本的な指針であるビジョンの下に、施策に落とし込んだビジョン推進計画というのができて、それでソフト、ハード、行動計画としていくと、そんなような形でございます。

○部会長 ですから、プロセスとしては、この部会の内容もそのビジョンのほうに反映さ

れていくということですかね。

○教育委員会事務局次長 そうですね。すみません。ちょっと説明が足りませんでした。

今日は、杉並区の大きな政策を決めていく基本構想の第3部会です。実は当時の区の基本構想審議会でも、子ども、子育て、教育という部会がございました。そこでの議論がやや先行して進んでいて、子どもはこうやって育てるのがいいんじゃないかとか、家庭はこうあるべきじゃないかとか、学びというのはこういうふうに大事じゃないかみたいにいるんな議論があって、それと整合を取りながら、教育委員会で教育ビジョンの審議会を持って、同じ区がつくるものですから、区をつくる基本構想の学びという分野と教育ビジョンがちぐはぐというのもおかしな話なんで、共通事項というのは大きな理念体系になっていくのかなという形で、前回もそういった整理をしております。

○委員 委員が触れてくださって、改めて教育ビジョン2012を見てみたんですけど、目指す人間像に書かれている人って、すごいかっこいい人だなと、読んでいて思ったんですけど。「夢に向かい、志をもって、自らの道を拓く人」とありますけど、逆に、こういうふう生きていなくても大丈夫だよという社会をつくりたいのかなと。さっきまでの多様性の話って、そっちなんじゃないのかなと、今聞いていて思ったんですけども、どうなんですかね。

○部会長 私もそう思います。そこからこぼれている人たちがいて、その人は駄目なのかという話になっていって、「そうじゃないよね」というのがここの議論。そういう人たちも、一人一人がそこで自己実現ではないけど、自分で満足いく生活、人生が歩めるというようなこと、そういう目標に、そこに達せなくても、上げていなくても、こぼれる人たちの、逆に言えばそういう人たちのほうが多い。子どもたちも多い。だけど、その子どもたち一人一人が、自分がそのポジションにいて、自分の中で納得できるような生活とか人生が歩める。我々はよく、「DoingからBeingへ」という。何かするということが評価されるんじゃないくて、そこに「Be、いる」ということが認められていく、そういった社会をつかっていかなくちゃいけないんじゃないか。子どもたちは何かできたということの評価されるんじゃないくて、もうあなたはそこにいるということで、もうそこに認められていく、そういったことが必要なんだと。何ができる、できないではなくて、そこにいること自体、そこにあること自体で、認められていく。我々は、「〇〇ができる、だからいいよね」と評価しちゃうけど、何ができる、できないではなくて、そこにいること、そこが評価される。いることで、もうそれでいいんだと、そういうような社会の考え方とかあり方とか

が求められてきている。

もうずっと議論していますが、自分も固定観念があったりとか価値観があったりとか、社会のそういったシステム、そこをもう本当に、もうぶっ壊していかなくちゃいけないというときに、どういうふうぶっ壊しながら新しいものをつくっていけるのかというのが少し見えていなくて、何か議論をしながら、私たちこの杉並の中で何か発信できるというか、どういうことを私たちは考えていけるのかというところを、いろんなアイデアを出していただければいいなと思います。

はい。どうぞ。

○委員 いること、あること自体を認め合うような社会を目指していくべきではないかとか。そういった、社会のあり方なり、いること、あること自体を認めるということ自体は非常に大切なことだと思うんですが、今回のテーマの「学び」という面で考えると、私は、主に子どもの教育という学びというほうで見た場合には、やはり学びに向かう力というか、努力する力ですよね。こういったものは、やはり身につけていってほしいと思っています。一つには、学校という場において、先生方に頑張っていたきたいという面があると同時に、とはいえ、学校教育でやっていることになかなか向かっていきにくいという子どもたくさんいると思うので、そういった意味で、多様な体験の機会というのがあれば、そういった中で、これにだったら向かっていきたいというものを見つけられるような機会も、社会として、大人として、できるだけ準備したいなという思いはあります。

もう一つは、今回の資料の中でも子どもたちの通塾率という資料があって、まあ、すごいですね。結局、学校、家庭はそれぞれとして、結局できるだけ、子どものうちから多様な価値観というものに触れてほしいなと。そのために一番、手っ取り早いという言い方はよくないかもしれないですけども、それは、多分、多様な人に触れることだと思います。そういう意味で、地域と学校との関係というものが杉並区でもずっと言われてきていて、今回、私も幾つか資料をお願いしていたんですけども、この15年、20年前と比べると、本当に地域が学校に関わるというのは、非常に進んできたと思います。

私自身も、たぶん一番古いと17年ぐらい前から小学校にゲストティーチャーで、運動会の種目なんですけども行かせてもらっていて、その頃と比べると、学校が地域なり外部に開かれている度合いというのは、この15年でもものすごく進んできたと思いますので、現状と課題という意味では、現状そこまで地域との関係、多様な人に子どもが触れられる状況というのはできてきていると思います。

ただ一方で、一定の形がいろいろと整ってきたがゆえに、満足感と言うとよくないのかもしれないですけども、そこで惰性に流されてしまうとせつかくのそういった取組も停滞してしまうと思うので、次の段階を、次の10年間でどのように目指していくのか。そのための仕組み、仕掛けというものをどう作っていくのかということも、やはり、次の10年に向けては考えていかなければいけないのかなと思っております。以上です。

○部会長 はい。ありがとうございます。

○委員 いいですか。

○部会長 はい。どうぞ。

○委員 教育ビジョンを見て、久々に思い出して、区に聞いてみたいんですけども、いつもの杉並のこういう冊子を見ると、学校の経営力とか、「経営」という言い方をしているんですね。小学校、中学校、区立の学校の——これは何ページかな。僕は、経営という言葉って、会社で会社を経営するとかという、利益を上げるというようなイメージで使っていたんで、普通の教育機関であれば、運営とかそういう言葉なのかなと思っていたんですけど、わざわざ学校の経営力を何々と。8ページですね、「目標Ⅱ 学校の経営力・教育力を高めます」のこの「経営力」というのは、一体どんな利益をもたらす、そういうイメージで、この経営力という言葉を使っているのかなというのは、少し気になっていたんですけども。すみません、話の腰を折っちゃって。

○教育政策担当部長 教育政策担当部長の大島といいます。

経営という言葉は、なかなか一般の方、学校で使うといったところに不思議だなと思われるかもしれませんが、私どもよく使っているのが、校長先生がつくるのは学校経営方針というものをつくります。その経営方針にのっとって、教育課程というものをつくってまいりますので、特に民間だけが使っているという言葉ではないと受け止めています。

その経営というのは、当然、教育課程、要するに子どもたちの教育活動を考えるということもありますし、教員の育成ということもあります。学校を運営するときに必要となるもの全てを経営と考えております。以上です。

○委員 ごめんなさい。よく分からなかったんですけども、校長先生がつくる、その最初の経営何とかというのは、ほかの日本全国の公立の学校がそういうものをつくっているの、経営力というのを使うんだということですか。

○教育政策担当部長 もちろん、経営というものがあるから経営方針というのを立てるんですけども、これはどの学校でもつくっているものということになります。

○委員 日本全国的に、教育界はそういう言い方をしているということですか。

○教育政策担当部長 そうです。はい。

○委員 ふーん。すみません。変な、細かいところで。

それで、気になるのが、学校ごとの格差がないかどうかというのが、実はすごく心配なんです。杉並区の学校は、ホームページもそれぞれ学校ごとにつくるというような形で、ホームページの出来も違っていたりするんですよね。そういう、学校ごとに競わせるような、序列をつけて、この学校がすごく教育力が高いんだとかいうようなイメージをすごくこの間つけてきたかなという印象が僕にはあるんですね。

そういう中で、当時は学校の、小中学校の選択制度なども生まれてきたと思うんですけども、それによって、うまく経営ができて、その経営力が発揮できる校長先生や教員の方がいる場所、学校であればいいのかもしれないですけども、そうではないところについては、そのままそれを放置しちゃって本当にいいのかなと。さきほどの、個人個人が、起業できる人はいいけども、起業できない人は、そのまま負のスパイラルに落ち込んでしまっていていいのかというのと同じようなイメージになっているのかなというところはあるんですね。

そういう部分では、今、杉並区の各学校の競わせ方——という言い方をすると失礼になっちゃうかもしれないんですけども、そういうのというのはどうなっているんですかね。

○教育政策担当部長 教育政策担当部長です。

学校を競わせるということで、私どもは考えてはいないです。各学校が特色を持っていると思います。その特色を持った経営をしっかりと支えていくというのが教育委員会の役割だろうと考えております。その上で、どうやって支えているかということは、教育人事課で言えば、教員の人材といったところで支えているところがあり、あとは済美教育センターが各学校の特色に応じて経営を支えるということで、日々取り組んでいるところでございます。

○教育委員会事務局庶務課長 庶務課長の都筑でございます。

今、委員がおっしゃられたことは、選択制のこともありましたから、そのとおりでございます。その当時は、学校ごとの差分を一つのエネルギーとして動いていくという政策が取られていたと理解はできると思います。それは、先ほど他の委員からもありましたけど、学校に多くの地域の方が見違えるように来るようになったと、今度はそれが開かれていく過程で、競争から共生へと、今、学校のあり方そのものが変わってきて、いるということ

だと思えます。

ですから、格差があるということが、今度は学校ごとの、先ほど経営という言葉もありましたけど、地域の人も含めて、学校運営協議会も含めてですけれども、地域でつくっていく学校というように形を今変えつつある。変えつつあるというか、変わってきていると言っていいところまで来ているのかというような、そういう実感を持っています。また、その先に、どうなっていくのかということは、まさにこの10年の議論の中に答えがあるのかなと思えます。

○子ども家庭部長 子ども家庭部長の武井です。

私は、教育とは立場が違うんですけど、この間の議論を聞いていて、今の発言に対して思うことは、学校に格差があるんじゃないかというご意見だったんですけど、別に学校が均一であればいいということではないんだと思うんですよ。今までに、副会長をはじめとしたご意見で出されたのは、それぞれの学校があったときに、例えばそれが物差しで評価されて、「いい学校」という評価を受けているところに行った子どもが「よかった、いい」と。で、そうでないとよくないと、そういう評価のされ方が問題なのではないかということであって、学校自体が全て、押しなべて金太郎飴のように同じであればいいということではないんだと捉えているんですけど、いかがでしょうか。

○委員 すみません。何か変な方向性に議論が行っちゃったんで、もうまとめちゃいますけれども。

気にしているのは、学校の教員の人たちに様々なことが押しつけられて、この学校ではこうやっているのにこっちの学校ではやっていないのが教員のせいだ、校長のせいだとなっていないかというのがすごく心配なのと、その特色があるという言い方でそれが評価されているというお話でしたけれども、今、子ども家庭部長がおっしゃっているように、結局、周りがどう評価するか、尺度をどうつくるかの問題なんですよ。なので、それが杉並区や教育委員会の中でどういうふうに変わってきたのかというのがすごく心配だったので、少しこういうお話をしました。

ただ、金太郎飴のように特色のないような学校である必要性はないと思えますけども、やはり必要な教育が、必要な水準、しっかりと、どの学校に行っても受けられるというところはやはり重要だと思いますし、そういう中で、最近は教員の方々の働き方についても話題になっていますけども、学校教育の中での教員側の働き方が、今まですごい過酷だと。部活もやりながら、朝、生徒が登校する前から行って、生徒が下校した後もずっと、その

評価のための持ち帰りの仕事までしているとかって、そういう教員の方々の負担というの
も軽減していかないと、学校というのは、学校の中がよくなるんじゃないかなという
不安が僕はあるので、その辺のちょっとお話を聞いてみたかったです。すみません。

○部会長 ありがとうございます。僕は杉並区民ではないのですが、先ほど委員が言っ
たように、杉並の場合は、地域の方々が各学校の中に入ってきて、本当に地域の力を生か
しながら、各学校が、地域住民と共に、特色のある教育をする。だから、教育の質とい
うのは担保しなければいけないけど、そこに特色というところが各地域の方々の参入が今は
徐々に見られてきているというのが、この杉並の教育の一つの特徴ではないかなと。だん
だんと門が開かれてきて、地域住民も入ってこられているような、それがさらに今後進ん
でいくということが求められている方向ではないかなとは思いますが。

そういう中であって、地域住民が関わることによって、いろいろな人々が地域の中にい
て、その人たちが子どもたちと関わることによって、いろいろな体験、職業も含めて、い
ろんな大人がいて、いろんな生き方があって、単一の価値観とか単一の職業だけではなく
て、そういうようなことを、小学生や中学生がそこで知っていく。地域の方々にいろん
な人たちがいて、その人たちが生き生きとしているというようなところも、そこで体験でき
ればいいのかなと思っています。

あと、先ほど委員から、努力する力ということ。これも大事なんじゃないかという一方
で、僕は要保護児童の担当をしていたので、一方で諦める子どもたち。子どもたちが何か
目標を持てれば、やはりみんな努力するんですよ。何か認められたりとか、こうなりた
い、ああなりたいというような、そういったものを持っていた子どもたちというのは、本
当に一生懸命頑張るけども、しかし一方では、今の貧困の問題も含めて、そういうことが
なかなか持てない子どもたちは、努力することすら諦めてしまう。その諦めではなくて、
何か生き生きとした目標が持てるような。やはり、そこには褒められるとか認められると
か、そういった自己肯定感が高まっていくことによって、子どもたちは努力していく。結
果として努力していくというようになっていく。そういった努力できるような関わり方が
できるような、そういった社会が求められていくのかなとは思ってはいるんですけども。

ただ、委員から、現状と課題を整理していただきながら、そして、目指すべき、杉並と
して目指すべきという姿も語っていただいたので、この様式では、A、B、Cというのが
ありますけども、それぞれのところで、現状、課題があって、そういったところに私たち
はどういう、自分はどういう、杉並の教育とか学びの姿があって、そこに向かっていくた

めにはどうしていったらいいのかというような提案も、ぜひご意見を頂ければなと思っています。

事務局から何かありますか。このまま続けて大丈夫ですか。

○教育委員会事務局次長 前半が終わる頃なので、前半の議論で足りないようなところもご意見をというのがあるかもしれません。今のところを少し整理して、共通認識に少しつなげていただければと思います。

少し大きなトレンドで、杉並の教育改革を振り返ると、平成12年に、杉並区という自治体、特別区というのは一人前の地方自治体になったんですね。東京都の内部団体的なものだったんですけども。平成12年、これは特別区の区制の制度でも一番大きなトピックの年なんです。

簡単に言うと、それまで東京都の教育目標というのがあって、杉並区も他区も、大体都の教育目標というのが教育委員会の教育目標になって、どこの学校も大体何となく同じような教育目標を持ってというような、運営がされていたんだと思います。

平成12年度は、一人前の自治体になろうということで、独自の教育目標を基礎自治体として持っていこうという気運があり、そのあたりから、この教育ビジョンの前身になるようなアクションプランというものをつくったりとか、教育改革を進めていこうということで、20年ぐらい前から様々な取組を進めてきました。

現教育ビジョン以前は、どちらかという、さきほど庶務課長が申し上げたとおり、違いとか落差というんでしょうか、差のエネルギーでいわゆる「競う」というほうの競争で教育改革が進んできたと思います。それは、ある意味その時期はその時期で狙いがあった、やはり各学校の力を上げていこうというようなものでやってきたことで、その時分はそれがそれで、一つの狙いだったと思っています。ただ、大きく変わってきたのは、この現ビジョンあたりから、今度は「共に創る」共創のほうで、これからはみんなで一緒につくっていこうと、みんなで一緒に考えていこう、みんなで一緒に支えていこうと、そういう方向になっています。ですので、今、議論していただいている多様性を認めようとか、やり直しができるとか、いろんな方向性は、今、大きなトレンドで見ると、共に創る、共に学ぶというところのさらに次のステップとして、この次の10年、また次の姿として、杉並区の教育が歩むべき道みたいなものを、最終的には分かりやすいキーワードみたいなものが出てくるといいと思うんですけども、そんな方向で、少し、競争から共創に、今変わりつつあると。その次のまた10年はどうなのかなというところで、我々もそういったところを

皆さんのお知恵を借りてつくり上げていきたいと、そんなふうに思っています。ちょっと前半はその程度で、後半も、リクエストがあれば、庶務課長から少しお話をさせていただきます。

○教育委員会事務局庶務課長 庶務課長です。

何か自分でここに座っているながら、ビジョンの審議会かなと思うぐらい、ビジョンのキーワードをたくさん出していただいて、うれしいのと半分と、少しくう、方向性が少し狭まっちゃったかなというような気分もしているんですけども。

基本構想そのもののところの第3部会というところと言うと、冒頭に部会長が学びというのは通底するものであるというようにお話を頂いたところがあったと思います。それは第3部会のテーマとして通底する以上に、基本構想そのものに通底するところではないだろうかというふうに考えています。

そういうところで言うと、私どものほうに副部会長にご指導いただいております、皆さんにもお配りしたと思いますけど、点検・評価の中でも、やはり学びというのは住民自治の基盤になるものであるというところ。だとするならばというところで、副部会長のお言葉を借りれば、教育行政は一般行政に優越すべきものではないかといったことを先年の点検・評価のときに頂戴したところであります。

そういうふうに捉え返していくと、学校教育も含めて、就学前から、そして生涯学習、学び切るといいますか、学び抜くといえますか、そういったところの広々としたところで、この基本構想の通底する部分を支える、学びが支えているんだというようなところで、少しご議論といえますかご意見があったら、ぜひ承りたいと、聞いてみたいというような、そんな感想を持ちました。お願いいたします。

○部会長 ありがとうございます。

○委員 今のお話を伺っていて、学びは住民自治だというお話があったと思うんですけども、まさに今、僕は、杉並第十小学校のコミュニティスクールの委員をやっておりまして、本当にそれを実感することが多いです。何を学んでいるかって、一番大きなところで言うと、人は正解じゃなくて納得解で動くんだなというところを一番学び合っているのかなと思います。みんな、やはり、学校をよくしよう、地域をよくしようという。

ただ、その「よく」が違うんですね。では、何が、何をもって「よく」としているのか。それを、今の世の中だったらどれを優先すべきか。今のタイミングだったらどれを優先すべきか。今のマンパワーだと、という様々な要因の中で、みんなで納得できるところ

を見つけ出していくという、そのプロセスに、すごく、みんなで学びを感じているのかなと思っていて。それを、今の段階で、大人がちゃんと実感できる、自分の正解を押しつけるのではなくて、みんなでつくる中で納得したものを一緒につくり上げていくというプロセスを経験できているって、すごく大きなことだと思うんですけども。まさにそれを、子どもたちにも伝えていきたいというのは、やりながら思っているところでした。

○委員 栢尾です。私、体協から出ているんですけど、もともと電子部品メーカーの会社に40年いまして、その後、その関係で、今でもちょっと仕事を持っているんですけども。80年代、90年代のあの電子部品、電子機器の日本のすごい世界を、ちょうど我々の世代が生き抜いてきた。生き抜いてきたと言うと、少し語弊があるな。生きてきた世界なんですね。

そのときの製品というのは、全て形がある製品が多くて、つくったものが全て売れる。逆に、どうやってつくるかというのでも、必死になってそれを考えて、形にして、それが全世界で売れるという。日本で一番、ある意味では、それも製品が次から次へと出てくる時代。80年代——70年代の後半から80年代、90年代前半ですね。それで、90年代後半からがらっと変わり始めて、2000年になったら、スマホが2005年に出てきて、やはりそれからがらっと変わってきて、今こういうような形になって、冒頭に話があったように、10年後、AIの話が出てくると。

我々のときというのは、そういう形で形になって、ある意味では、「どこの会社？」というと、「これをやっている会社」と、子どもにすぐ説明できるわけです。ところが、今は、たぶん、お父さんお母さん方は何をやっている、子どもたちになかなか説明しにくいんじゃないかなと思うんですね。そういった世界に、今、日本はなったし、世界もそうなっている。この中で10年後どうなっているんだというのが、非常に恐ろしいかなというか、逆に、何でもできる世界になったなど、僕は思っているんですけども。

この間、先輩の1人から「最近子どもの理科離れが大きいんだと」聞きました。だから、その理科離れを防ぐ本を何か書きたいんだけど、手伝ってくれないと言われてたり。

いや、理科離れって、我々が考えている理科、科学というのは、形にする科学、理科であって、もしかしたら10年先というのは、そういうものじゃないかもしれない。それを考えないと、10年先の学びのテーマって、見えてこないなと。本当につい最近そう思ってきて、では、それをどう考えたらいいいのかというと、僕はまだ解がないんですけども。

だから、今の物差しで考えられない内容がこれからどんどん出てくる。そうすると、そ

うなっても、きっちり自分のエンジン、小さくてもいいから自分のエンジンを——、まあモーターかな、持っている子がいれば、小さくても持っていれば、それを大きくすれば動けるわけで、自分で動けるモーター、エンジンを持っている子にどう育てているかということと、やはり好奇心というのが一番の僕は原動力だと思っているんですけども、その好奇心をどのように持たせられるんだろうかと。でも、好奇心って、持たせられるものかな、どうかなと。となると、今度は、やはりそれだけの刺激を常に与えることかなとなると、先ほどもあったいろんな出会いとか、そういった関係性のある、いろんなところ、いろんな場面を経験させる。それも1人で経験させる。これらを含めて、そういったところが、やはり一つの基本にしないといけないのかなと。あとはもう、応用問題というのはもう、いろいろ、子どもたちが自分で考えていかなきゃいけないし、考えていけばいいわけなので。そういうふうにしていくのかなと思った次第です。以上です。

○部会長 ありがとうございます。

今の、10年後ということで、よく副部会長もAIとか、いろいろこう出てきていますけども、10年後のこの社会の中で教育って、どんな……

○副部会長 分からないですね。

○部会長 分からないですね。ありがとうございます。

○委員 好奇心というキーワードを聞いていて、最初に副部会長がおっしゃってくださった教育シンポジウムで「わくわく」というキーワードが出てきたのと、すごい近いものを感じたんですけれども。人生100年時代と考えたときに、100年生きる力を身につけるというのも大事だと思うんですけど、100年生きたいと思えるのが大事だなと思って。100年生きたいと思える、まだ生きたいとか、もっと生きたいとか、それこそ10年、5年生きたいと思える社会ってどういう社会だろうとか、逆にどういう力を持っていたら、まだ生きたいと思えるだろうなどというのは、ずっともやもやしています。共有です。

○部会長 どうぞ。

○委員 ありがとうございます。中学生の生徒と、将来の職業についてお話をさせてもらう機会が、委員と、以前やったときに……

○委員 ああ。

○委員 あったんですね。職業体験をした後に、いろいろな、夢とか、将来何になりたいかとかというのを話したときに、こうやりたい、これになりたいから一生懸命勉強したいなんていう子もいたんですが、「僕は勉強はしません。学校は一切必要ありません」と言

った子がいたんですね。それは、僕はユーチューバーになるからだと言ったんです。

そのときに、僕は30年以上長く生きているけども、何かアドバイスとして、何を言っているか、ちょっと分からなかったんですね。いや、「そんなのじゃだめだよ」とか、「潰しが利くようにしなさい」とかって、そういうことを言うことは多分簡単なんですけど、まあユーチューバーなんていうのは、はっきり言って、今日からなれる。誰も見てくれなくてもユーチューバーなんですよね。それをどれだけヒットさせるかとか登録させるかでお金になるというところで、なりわいとしてやっていくのか。なりわいとしなくてもいいという価値も、ユーチューバーにはあるわけですよね、先ほど委員が言ったように。

だから、そうなる、いきがいとしてユーチューバーになるんだったら、それでも正解なのかなと思ったんです。

それで、結局、委員が言ったように、正解がない社会になっていくという中では、本当に、我々もいろいろ学んでいかなきゃいけないことがすごくあるような気がして。

P T Aをやって、アクティブラーニングとか小中一貫教育とか特別支援、I C T、プログラミングとかとC Sとかも、全て、これ、一つ一つ大きな柱なんですけど、全て連動すれば、とても理想的な社会がつかれるようになっていくんですが、これはもう、大人が学ばなければ全く意味がないとすごく思うんですね。特別支援教育に関して、研修会をやったって、結局はその特別な支援が必要な子どもとか生徒の保護者ばかりが集まるというような状況に対して、それは違うんだと言っても、自分のことじゃないと言って、来ない大人もすごく多いという中で、本当に、学び終わってしまったという感覚ではいけないのかなと、そのように思っている次第です。

○部会長 今、キーワードとして、僕、ぴんときた。正解のない社会というところ、今まではある程度正解があった。そこに目指していくというところがあったけど、これから先の社会って、正解が、何が正しいかも分からないという中で、何を、どのようなことを私たちが求めていくのか。先ほどもキーワードの中で、競い合う競争から、共に創る共創。次の10年のどんなキーワードとしてあるのかというような話がありましたけども。

そんなことを少し意識しながら、ご発言いただければと思うんですが、どうぞ。

○委員 よろしいでしょうか。

杉並区の教育システムが2012年から新たに始まってということで、2019年、2020年——ちょうど、2006年、2007年、2008年かな、私は杉並区の公立小学校で英語の教育をさせていただきました。そのときちょうど指定校制がなくなった年で、小学校が選択制になった

んですよね。それで、人気のある校長先生のいる学校にもう生徒が集まって、具体的に申し上げると、浜田山小学校は、校長先生がすごくよくて、ものすごい数で、お母さんたちがものすごく教育に関心を持って進めていったようですね。それで、校長先生が高井戸に移ると、高井戸小学校が人気になる。ちょうど私はそのとき高井戸で校長先生から声をかけられて英語の教育をしていたんですけど、そのお名前も忘れてしまったんですが、自分のことを「ドラえもん」と呼んでいらして、ドラえもん先生とおっしゃっていて、校長室にはドラえもんの縫いぐるみがどーんと置いてあって、校長室のドアはいつも開いていて、誰でも、いつでも、どんなときでも入ってきて、ドラえもんに話していいんだよ、というようなスタンスを持った校長先生でいらしたんですね。そのとき、私もすごく懇意にさせていただいたんですが、やはり教育は人なのだなと思いました。やはり、子どもたちも、人に触れていきいきするところがある。

これからの教育においては、やはり自分たちで選んでいくという感じ、感覚ですね。

自分で選んで、自分でこうした。だから、これでいい、という感覚が最も大事なのかなと。それが、社会的序列の中の偏差値の中の上じゃなくても、自分で選んで、自分でこうして、自分で決めたんだから、だからこれでいい、と自分が思うこと。それがおそらく今後の、これからの10年の子どもたちの教育の中で最も求められている感覚。自分の子どもたちももう大学生ですけど、見ながら、形ではないんですけど、感覚ではないかなというふうに、感じています。

時代のキーワードとしては、多様性という言葉が出ているんですけど、それはおそらく遺伝的多様性ということで、ダーウィンがかつて1000年ぐらい前に、進化とは変化に適應することだと言ったんですけど、最も今それが言われている遺伝的多様性、つまり違ったもの同士がぶつかることによって変化が訪れ、その変化したものこそが生き抜く力を持つという意味なんですけれど、そういった、遺伝的多様性を持った子どもたちに育てるということなんです。

私の個人的な具体的な案なんですけれど、前回の文化・スポーツのときにお伝えしておきたかったかなと思うんですけど、アクティビティーですね。これはスポーツだけに限らず、文化的なことに限らず何でもいいんですけど、小学校の放課後の時間を使って、アクティビティーを提供できれば。そして、講師は地域の人材であったり、いろんなスキルを持った人材がいて、スポーツであろうと、文化、ビーズであろうと、お料理とか、普通の一般の方が手を挙げていいと思うんですね。子どもたちは、単発で参加ができる。つ

まり、1回300円とか500円とかみたいな、そういった感じで、もし好きであれば毎回毎回行ってもいいし、好きじゃなければ次の週は行かなくてもいい。そのときそのとき、1回ずつお金を払うから、別に損することもないし、行かなくても、という。講師の先生方もそれは分かった上で、そういったことを学校でできたらどうかなという。学校の自治という話も先ほど出ていましたけれど、私が学校で教えていた頃は、校長先生が絶大な権力を持っていらしたので、マネジメント、経営のほうもされていたので、私のお金なんかも出してくださいましたが、今はどうなっているのか分かりませんが、そういったマネジメントの一部として学校が外部から講師を連れてきて、子どもたちは好きなアクティビティーに単発で参加できるというようなシステムはどうかなと思いました。

子どもたちが桃井第二小学校に通っていた頃、年に1回、お買い物デーというのがありました。それは、その日だけ使える「桃二マネー」というのをつくって、幾ら持っているんですね。各クラスは出し物をするんですよ。八百屋さんであったり、お化け屋敷であったりとか、ネックレス、アクセサリ屋さんであったりとか、飛行機であったりとか、あとはゲームとか。それを桃二マネーを持って使うんですけど、使い切るんですね、一日で。順番に、自分のクラスのアクティビティーを通しながら。すごく好きでしたね。自分の持っているものを、自分で決めて、自分の中で満足していくという。こういった感覚、まあ学校でもできるかもしれないですけど、長く身につける技術として、教育の一環として、放課後の時間がそういった形で使えたらどうかなという。

イギリスのBBCというテレビ局がありまして、そのBBCがつくった映画に「ビリー・エリオット」という映画があるんですけど、日本では「リトル・ダンサー」という映画で、見られた方とか、いらっしゃいますか。

(該当者挙手)

○委員 おお。

○委員 あります。

○委員 ありますか。はい。

ビリーは本当に貧しい炭鉱夫の子どもなんですけれど、その単発でいろんなアクティビティーができるというのはイギリスの学校では普通なんですよ。ビリーのお父さんは炭鉱夫で、ストライキ中の炭鉱夫だから、収入がほとんどないんですけど、ビリーに強くなってほしいということで、毎回毎回、1ポンド、つまり200円ぐらいのお金を握らせて、ボクシングを習えと。学校の放課後時間はボクシングに行けと言って、お金を渡すんです

ね。それで、同じ体育館の中で、片方ではボクシングをやっていて、放課後クラスの片方ではクラシックバレエをやっているんですよ。ビリーは、ボクシングで強くなれともらったお金を、クラシックバレエに費やしちゃうんです。彼は男の子なんですけれど、家は炭鉱夫の家で本当に貧しいんですけれど、クラシックバレエに陶酔してしまって、最終的にはクラシックダンサーになるんですけれど。もし興味があればご覧になってください。日本名は「リトル・ダンサー」ですが、そういったスタイルの教育方法というか、子どもがアクティビティーを選んでいいという。それで、自分でやった。頑張った。努力した。でも、ここまで。でもそれでいい、と思える。思えることが大事かなと思います。

少し長くなって、失礼しました。

○部会長 ありがとうございます。

どうぞ。

○委員 今、委員からあった放課後の活動とかだと、今回、事務局が準備した資料27とか28で、資料27は、いわゆる学校支援本部としてどういったことをやるかということで、こちらは教育課程内の、手伝いというのも大分あるとは思いますが、学校支援本部として、そういった放課後の活動なりというのを独自にやっているところもあると思いますし、資料28ですと、土曜日学校は土曜日なんですけれども、放課後子ども教室は、まさに小学校の放課後の時間。各学校ごとに、自由遊びがベースになっていることが多いとは思いますが、それ以外に、先ほどおっしゃられていたような、いろいろなアクティビティー。これを、地域のそれが得意な人というんですかね、そういった方にやっていただいて、放課後子ども教室ですと、年間の保険料は800円とかかかるんですけども、あとはそれぞれのアクティビティーに参加するもしないも、子どもの自由。

ですので、例えば将棋だったら行くけども、ヨガだったら行かないとか、そういうような形で、今の仕組みでもやっている面はあると思います。ただ、放課後子ども教室は、小学校が40校あるうちの14校です。学校支援本部はもう全ての学校にありますけれども。

そういった意味で、まだ地域の方の力をもっと、子どものほうに向けてもらったり、実際に地域の人の一つの居場所になるという面もあるんだろうと思います。

もう一つ、今、小学校で、放課後等居場所事業にどんどん切り替えていく面もあるので、その中でそういったアクティビティーというんですかね、いろんな体験できる種目というものをどれだけ準備できるかというのが、まさに大人の側がどこまで頑張れるかなんだろうと思います。

もう一点、いわゆる大人の学びといいますか生涯学習の面で行くと、どうすればいいんだろうというのは、私も、正直、率直なところでは、あります。ただ、そのときに、やはり一つの間として、今は公の施設ですと、区民センター、集会所、そういったところがどうしても活動の間になっているかと思うんですけども、そこで、地域にあるシンボリックな施設である学校というものをどこまで、今まで以上に活用していけるのか。もちろんこれはハードの面だけじゃなくて、学びであれば当然ソフト面も必要になってくると思うんですけども、そういったものが、他の委員がおっしゃられたように正解のない社会になっていくというのは本当にそうだと思いますので、そのたびごとに、ある程度対応していく。その対応するための間というものをどれだけ身近な場所に持っていけるのか。そういったことも必要になってくると思います。

○教育委員会事務局次長 今、委員の質問に、答えようかなと思ったら、委員が全て答えていただいたので。

放課後のアクティビティーという話がありましたけど、今も少しそういう形態でやっています。ただ、先ほどから大人の学びとか大人も好奇心を、とありますけど、それから人生100年ということなので、何か議論の方向性で私自身が少し見えてきたのは、大人も引き続きいろいろ好奇心を持ち続けていけば、やはり学ぶ意欲というものもあって、身近なところがやっぱり、さっき庶務課長が言いましたけど、学びというのは、多分いろんな、区の行政全般に通底するところで、今、委員からございました区民施設などいろんなものがありますけども、身近なところで地域区民センターでもいいし、あるいはゆうゆう館という、高齢者の集まる場もありますし、それから学校。これは最たる、大きなものですが、そういったところがいろんな意味で学びの拠点になっていくとよいと考えます。

前回、委員がおっしゃっていただいたのが私は強く印象に残っているんですけど、スポーツもいろんな学校の施設を使って、そこでいろんな活動が、地域スポーツとして花咲いて、活動の間として、今度は支える間に回ってもらったりとか、そういった学びや活動とかコミュニティとか、そういった面でいろいろ学校施設が活用されていけばいいのかなという思いで、今後の10年は大人がいろんな意味で学びの間としてそういうところを利用しながら、アクティビティーや、あるいは部活とか、いろんなものを担ってもらおうとかですね。さきほどから色々な議論がありましたけど、子どもも小さいうちからいろんな人と出会えて、あ、こんな生き方があるのかなとか、いろんなことを学べるというようなことがあるのかなと感じました。

さきほどドラえもん先生が出ましたけども、今、教育委員になっている久保田先生です。

○委員 あ、久保田先生でしたね。

○教育委員会事務局次長 当時の高井戸小の校長先生です。今度お伝えしておきますので、ぜひお会いしていただければと思います。教育委員会には、着ぐるみは着ないで出てきていらっしゃっていますけれど。

○委員 いえ、着ぐるみは着ていらっしゃらなかったです。縫いぐるみがあった。

○教育委員会事務局次長 あ、そうですか。

○委員 着てない、着てない。

○教育委員会事務局次長 すみません。

○委員 ありがとうございます。

○部会長 どうぞ。

○委員 先ほど部会長も、委員もおっしゃっていた、正解のない社会になっていく際に、学びとはどうあるべきなのかみたいところで、今少し考えていたんですけども。

学びの際に、教育等を通じて差し出すものを、正解として差し出すのではなくて、一情報、一つの情報として差し出すという、差し出し方もすごく重要になってくるのかなと思いました。

さきほどの委員の話にも通じてくるんですけども、「ユーチューバーになるから、勉強しなくてもいい！」みたいに言われたときに、「なるほどね、それもアリだと思うよ」というのは、委員もおっしゃっていた、それでいいという承認をした上で、その上で、「でもね、国語はこういうふうに使くと、ユーチューバーはよりよくできるよ」みたいな、そういう情報の提供の仕方というのが求められてくるのかなというのは、今、お話を聞いていて思いました。

ちょうどさきほどのそこにつながってくるんですけども、杉十小で、今、「鬼滅の刃漢字ドリル」というのをつくっていて、あの鬼滅の刃の登場人物って、みんな、登場人物の名前がめちゃくちゃ漢字まみれなんですよね。それをもう、40人ぐらい出てくるんですけども、それが全部読み仮名のテストになっていて、それへの回答率がものすごいことになっているらしくて、みんなそのプリントを持って、取っていくみたいな。そういう、情報から面白さを見いだす方法みたいなのを教えてあげるといえるのは、すごく重要なことかなというのは、今話していて思いました。

○委員 鬼滅の刃のプロダクションって、杉並区にあるんだよね、たしか。

○委員 えっ、そうなんですか。

○委員 杉十のそばなんじゃないかな、たしかね。要するに、制作をやっているところ。まあ、それはどうでもいいですけど。

○企画課長 天沼ですね。

○委員 ですよ、たしか。

まあ、「共に学ぶ」ってね。だから、共に学ぶより、結局勝手に学ぶとか、今後の方向は。勝手に学ぶとか、要するに自分で学ぶ、1人で学ぶ力を養うとかね、それがやっぱり「共に」と並行し合っていくのが、理想的なスタイルなのかな。サッカーで言うドリブラーを育てるじゃないですけどね。要するに自分で何かできる知識を持った上での「共に」というのが一番、理想的かなと思いました。

あと、大人の生涯学習的なところだと、僕、郷土博物館が好きで、結構よく行くんですけど。杉並は割と昔からユニークな展覧会をやっていて、「高円寺フォーク伝説」とかね。

フォークロックの歴史みたいのや、ソノシート展とか。お若い方は分からないけど、ビニールの、昔のテレビアニメソングなんて、大体、ぺらぺらのソノシートでできていたんですけど。そういう展覧会とかをやって。今、分室のほうで「絵葉書から見る杉並」という、杉並の絵はがきコレクターの方が集めたのを展示されていて、これなんか、結構ほかの杉並の本に載っていないような、吉田園なんていうね、下高井戸に戦前あった、私人の吉田さんという方が造られた、一種の遊園地というの。プールがあって、冬に凍ると、氷を売ったり、そこでアイススケート場があったり、崖のところに滝みたいのがつくられていたりね。そういうような場所を撮った、戦前の絵はがきが展示されているんですよ。

杉並に住んでいた菅野力夫さんなんていう方がいて、明治20年から大正時代に、この思想家の、右翼ですね、頭山満の書生となって、その後、1人で世界探検旅行して、沖縄、台湾、香港を経て、シンガポールへ。マレー半島を北上し、ビルマからインド、パキスタン方面を旅して、途中、自分自身の絵はがきや小冊子売り歩きながら旅費に充てていたって。自分のプロマイドみたいのを東南アジアで売り歩いていたような、そういった、あんまりポピュラーじゃない偉人、杉並在住の偉人なんていう方もいらしてね。

ちょっと興味を持って、ネットなんかを調べると、「すぎなみ学」なんていうのをやっていらっしゃるの、あれは区のサークルでやっているんですかね。そこに、この吉田園のことを調べられた、おそらく高齢者の、そういう地理に興味のあるような方だと思んですけど、そういう方の文章が載っていたりしてね。

郷土愛という、ちょっと保守的な感じになっちゃうんだけど、杉並をこういう形で学んでいくようなものが、大人の生涯学習を超えて、小中学校なんかにあってもいいのかなというか、それが何かこの区を、まちをよくするようなところに、興味が行くんじゃないかというふうに、この「絵葉書から見る杉並展」を見に行つて思ったんですけどね。

だから、そういうような場所も部分活用していくといいのかなと思いました。

話題が二つ飛んだんで、分かりにくかったかもしれないですけども。

○部会長 ありがとうございます。

どうぞ。

○委員 先ほどから、地域の中の学校とか、周囲に開かれた学校という話が一つのテーマとして出ていると思うんですけど、資料25の第3部会のデータブックを見てみると、3番、通常学校介助員ボランティアの配置とか、4番の部活動の外部指導員とか、あと10番の学校サポーターとかを見ると、減少しているようにも見えるんですよ。特に、直近。

直近はあれですか、多分、データがそろっていないのか何か分からないんですけど、かなり減っているように見えるんですけど。これを、どういうふうに解釈していらっしゃるのかなというのが、今の僕らの議論の方向性と逆の方向に進んでいるような気もしたので、少し気になっているんですけど、どのようにお考えなんでしょうか。

○教育委員会事務局次長 では、ちょっと、違ったら補足もしてほしいんですが。

地域とともにある学校づくりというコンセプトがずっとあって、もちろん地域の人材に自主的にいろいろご参画いただいています。さきほどの学校支援本部であるとか、委員が言っていたような、地域の方による部活の外部指導員とか。杉並区は、結構いち早くそういう局面を、取組として出しているんですけども、現実の問題点として、そういった方々の高齢化であったりとか、固定化であったりとか、そういった問題があります。

これは、全般的なんですけど、この学びの分野ではないですけど、例えば、杉並区の自治の基礎を担っている町会・自治会なども高齢化が進んでいたりとか。ですから、持続可能な、そういう外部人材のご参画を頂くような取組というのをいかに、さらに広げていくかというところは、区としても、教育委員会としても、教育とか学校を取り巻く人材に、いろいろと手を貸していただいていますけども、そういった現実的な問題もあるのは事実なんです。そこをどういうふうにつなげていくかというところ、広げていくかというのは、課題だと思っています。

○委員 ありがとうございます。先ほどから出ているように、子どもに多様な人が関わっ

て、多様な生き方を見せていくという中では、やはりそういう問題を解決していく必要があるのかなと考えていました。以上です。

○部会長 ありがとうございます。

副部会長、ありますか。

○副部会長 いいですか。

○部会長 どうぞ。

○副部会長 先ほど、10年後どうなるかと言われて、「いや分からないです」と言ってしまったのですが……。実は、それについては、少しあれこれ考えているのと、あと、さきほどの教育ビジョンの審議会のことも考えていて、ちょっと困ったなと思っていたのです。

ここは「学び」を検討する、第3部会であるということと、それから、また厳しい重い話になるかもしれませんが、このコロナの問題もあって、女性の自殺者が急増しているのです。前年比8割増ということですよ。

何が問題なのかというと、ちょっとこの間、例のT中さんが口を滑らせたと言われていたのですが、「日本の企業はなかなか首を切らないので、非正規雇用者を増やしたのだ」と言ってしまったと言われていて、同一労働同一賃金の実現しないまま非正規雇用が増やされたという形になっていて、結局、それが今の状況下でしわ寄せが、弱いところ、つまり非正規就労の人たちに行ってしまうという形で、貧困層が増えることになっているのです。

そういうことの中で、では、子どもたちがそういう状況からどうやって抜け出せるようにするのかを考えるのと同時に、お母さん方をどうするのかを問わなければならない。シングルマザーが特に厳しい状況にあるので、どう支援するのかといったことも議論しなくてはいけないなと思いながら、それは政治の話なので、ここでは、というふうに思いつつ、では教育に何ができるのかということを問うていって、さあどうしたらいいのかと、今考え込んでしまっていて、困ったなと思っていたのです。

その反面で、人々が自己責任論のようなものにとらわれてしまっているところがあると思うのです。

貧困になったのはおまえが悪いから、努力しないからだというようにして、自分が悪いのだと、責任を個人が全部引き取ってしまうようになってしまっていないだろうか、それから、自分が自己実現できないのは自分が悪いからなのだというように、その原因の所

在つまり責任を全部引き取れというような圧力が、社会的にかかってしまっていないだろうかですか、そういうことも思ったりします。

先ほど申し上げた、本当は、横の多元化とか多様化にいかなければいけないところが、常に縦の序列化に組み替えられてしまうということも、それぞれの人が全部自分で責任を引き取ろうとしてしまうということに行き着いてしまうのではないか。そして、全てが自己責任で片づけられてしまうというようなことになってはいないだろうか、ということなのです。

その裏返しが、クレーマーであったり、自分は悪くないと言い張るというような形の中でのいがみ合いであったり、そういうことになっている面はないだろうかと思いつつ、皆さんのお話を伺っていて、学びや教育でそれが全部解決できるということではないとは思いますが、やはりそうしたことを、次の世代に引き継いでいかなないようにするにはどうしたらいいのかということは考えなければいけないだろうと思います。

すみません、あれこれ情報が入ってくるものですから悲観的な話ばかりになってしまうのですが、そうはいっても、今のベーシック・インカム論が出てきても、これも某T中さんが言っているのですが、年金をやめたいからなのですね。その反面で、このコロナ禍で、約70兆とか100兆というお金を借金することになって、これがまた、いわゆる現代貨幣理論というやつで、国内で貨幣の信頼感を失わなければ、どんどん刷ってしまえばいいのだという議論に基づいているわけです。こんなことをやっていると、この国はもつのかなというのが不安で仕方がないというのも、一面あります。こんなことを言っていると終わらなくなるので、やめににしますけれども、そういうことの中で、では、次世代の子どもたちをどうするのかとか、大人がどう生きるのかといったことをやはり考えなければいけないのだと思うのです。

そのときに、私たちが議論しなければいけないのは、最低限どうしたらいいのかというようなところまで一旦下ろした上で、そこから先どうしようかという話をする事ではないか、とも思っています。

何かというと、先ほどから話をしてるように、誰一人として取り残さないようにしていくということと、それぞれが自分の人生をきちんと歩めるようにするにはどうしたらいいのかということを中心に考えて、今、皆さんが議論されていることというのは、こういうことになるのではないかと思います。今まではいわゆる社会のあり方としては、それぞれが縦割りの中で、それぞれが機能分担して、つまり分業体制の中で、社会システムが

回るようにしてきたということがあるので、学校は学校の機能しか持つてはいけなかったのですが、それを、せっかく施設があるのだし、夜は使われていないのだし、という議論をし始めれば、もっと多様に使われていいのではないかということになるだろうと思います。それならば、校庭だって、プレーパークをやっていいかもしれませんし、空き教室を使って地域の方々が入ってきては理科の実験教室をやってもいいかもしれませんし、いろんな活動が学校の中であるよというような場が、例えば午後3時以降は、そういう活動を行う場が全部あるとか、そういう形につくってしまってもいいのかもしれないわけです。

さらに、今、GIGAスクールが入ってきて、個別学習が提唱されているわけですが、先ほど委員がおっしゃったように、本当はこれは自分で学ぶのだということなのですが、学んだ成果は私有してはいけない、学んだらみんなで共有しましょうとか、知識は公共財なのだから、教え合う関係をつくろうという形で、個別最適で好奇心を持ってどんどん探究して、学んでいって、さらに学び合うだけではなくて、教え合う関係をつくろうという形にしていく。そういうことの中で、それぞれが自分の好奇心を持って探求していくと、誰かと共有できたり、誰かに教えてあげることができたり、さらには低学年が高学年を教えたり、子どもが大人を教えるもいいはずなのです。そういうことの中で、学び合う関係だけではなくて、教え合う関係をどうつくるのかというような議論もしてもいいのではないかなとも思ったのです。

その意味では、責任を全部自分でかぶらないといったことと同時に、自分が得たものを独占しないというような形でのシステムのつくり方みたいなものというのはあるのではないかと、思います。

そういうことの中で、子どもたちが、自分1人で孤独に自分の人生を考えるのではなくて、誰かと一緒になって、また、誰かに手伝ってもらって、自分も誰かを教えてあげながら、お互いの人生に関わり合えるのだし、自分で人生をつくれるし、そこで間違っと思ったら組替えができるとか、変われるというようなことを、ともに考えることができるような社会をつくっていく、そういった形で学びのシステムをつくるということが考えられないかと思っています。こういうことを構想して、実装することで、この社会をしっかりと次世代の子たちに託していく、そういうことができるといいなと思って、お話を伺っていました。

さあどうするか、ということになると、また、天を仰いでいらっしゃるので、部会長にお願いしたいと思っておりますけれども。以上です。

○部会長 ありがとうございます。

うーん……。どのようにこれを考えていこうかなと、さきほどのキーワードで、本当にもう、正解がない社会の中でどう我々は生きていくのかというところと。

最近また言われていますけども、夜間学校というところが、昔は学校に通えなかった人たちが行くということで、全国的にすごい減ってはきている。ただ、有効利用で言えば、もう一度そういった夜間学校みたいなところで、何か地域の人たちがあそこで学び合えるようなところがあったり。先ほど、子どもたちのほうが、この携帯というか、スマホとか、どんどんできますよね。そういう子どもたちの知識を、分からない大人たちに伝えるような場というところでも自己肯定感が育まれたりとか、夜のそういった学校のあり方みたいなところも、地域の中でいろんな人材を活用しながら教え合うということも、学び合う、教え合うという関係も、そこでできるのかなというようなことを少し考えました。

私は埼玉に今キャンパスがあるので、埼玉の子ども大学といって、ドイツから取り入れたものを、地域の大学が提供して、大学に地域の子どもたちを呼んで、うちは理系があるので、やはり人気があるのは実験系なんですよね、気象だとか。それで、実験室に小学生の子どもたちが来て、一応、学生と呼ばれていて、4回しかやりませんが、そういう大学に来て、子ども大学という形で、本物のことを学べるというようなことで、興味関心が。うちの大学のほうなんで、埼玉の熊谷とか、隣の滑川というのが渋柿の名産地なので、実際に渋柿を作って、1か月後にその干し柿が取れるとかというような、そういった地域の、先ほどの「すぎなみ学」ではないけれども、今、「渋谷学」や「しながわ学」とか各地域地域ごとにそういった地元の学びというところ、そういったことによって、こんなところにこんな、自分たちの住んでいるところに、そこにプライドを持てたりとか自負心があったりというようなことも、その地域の愛着ということが出てくる、そういった学びなんかもあるといいのかなという気がしましたけど。

ですから、学び方も、共に学ぶというだけじゃなくて、1人で学んでもいいんじゃないか、いろいろな学び方もあってもいいんじゃないかというようなところで、そういったところを今後、この杉並という、本当にいろんな社会資源があって、いろんな人材もある中で、子どもたち、次の時代を担う子どもたちに何ができるのか、提供できるのかということが考えられて、具体的なものになっていけばいいかなというような気がしていました。

本当に、正解のないというところで、正解がないからいろいろあるんだろうなと。いろんなことが考えられるなと。全てが正解なんではないかなというようなところを感じなが

ら聞いていました。

また、次回が第5回で、これまで1回からずっとやってきたことの総まとめで、こぼしたところとかを含めて、また皆さんと議論していくというような時間になると思うんですけども、今日はそんなようなお話を皆さんから受けて、感想のようなものになってしまいましたけれども、お話をさせていただきましたが、何か事務局から、何かありますか。

または、委員の皆さんから、まだ言い足りないようなところがあれば、コメントを頂いてと思いますけれども、いかがでしょうか。

○委員 1点だけいいですか。

○部会長 どうぞ。

○委員 地域の力をという話の中で、スポーツ系もそうなんですけど、今一番困るだろうなと思っているのは、やはりボランティア、サポートする人の高年齢化。先ほどの話ですね。これは、本当にいかんともしがたいところになっていて、杉並だけではなくて、ほかの区も全部そんな感じなんです。やはり50代、60代の方の、社会に、いろいろボランティアをやっていただく方がどんどん減っているんですね。これをどうしたらいいんだろうかということシステム的に考えなくてはいけないのかなと思っています。そのあたりで何か工夫が。10年後になると、もう、団塊の世代がほとんどおられなくなるんで。

さらにそういう意味では、そのサポートしていただける人間がいなくなったときに、地域で何かと言っても、結構厳しい。この10年間で、やはり親御さんたちを、子どもたちに何を逆に教えるかということ教える機会を与えとか、何か、そういう、50代、60代、まあはっきり言えば40代ぐらいからの人たちをどういうふうに取り込むか。あとは、働き方がどんどんこれから変わっていくと思うので、副業という一つの考え方も、もっともっと取り入れながら、そういうボランティア、それからサポートするというのが日常的にできる仕組みを10年ぐらいかけてつくっていく必要があるかなと思ったところです。

以上です。

○部会長 はい。ありがとうございました。

そのほか、何か、コメントがありましたら。どうぞ。

○委員 今、ボランティアのお話が出たんですけど、私が先ほどお伝えした放課後のアクティビティーに関して、指導者の方はボランティアではなくて、それをお仕事とされるということでお伝えしたので、その裁量を校長先生が持っていらっしゃるのか教育委員の方が持っていらっしゃるのかは分からないけれど、ヨーロッパでは、放課後の時間に教え

に来る。単発で気軽に子どもたちが参加できるんだけど、指導者はプロで、プロとして教えているというスタンスですね。だから、ボランティアの方が余った時間で自主的に来ているというよりは、プロの方がプロを育てるために来るんだけど、子どもたちにとってはすごく垣根が低い、気軽に参加できる、小さなお金でトライできるアクティビティーということなんです。

○部会長 はい。

そのほか、何かありますか。

どうぞ。

○委員 先ほど副部会長がおっしゃっていたみたいに、そもそも学びに到達できない、学びが保障されていない人たちもいるんじゃないかなというところを聞いたときに、やはり教育と、福祉の部分も入ってくるのかな、なんていうことを想起して。

そのあたりの、ぼや一としたところをしっかりと役割分担といいますか、何かそういったところをしていくのも、教育側として必要なのかなというのは思いました。

○部会長 ありがとうございます。

我々も、どうしても健常のところをイメージしますが、いろんな事情があって障害も含めて、学びができないというような人たちにとっても、そういった機会が与えられるとかいうようなことと。あとは、足立区かどこですかね、僕は夜間学校と言ったけど、早朝学校でもいいと思うんですね。ご飯が食べられない子どもたちに学校が朝食を、地域の人がご飯を作って、食べさせる。我々がNPOでやったところには、親が作ってくれないならば、子どもたちが自分の力で料理ができればいいよねということで、卵焼きを焼くとか、そういうようなことを子どもたちに伝えていくというようなことを、この杉並で1回だけやったんですけども。ですから、そういったところでは、早起きのお年寄りがいれば、学校に早くに来て、調理室でご飯を子どもたちと一緒に作って、一緒にご飯を食べるとか、そういったところで朝ご飯が保障されていくとかというような、そんな取組なんか、全ての子どもたちに提供できるような、そんな学校での取組なんか面白いのかなとか。

すみません。また余分な話をしてしまいましたが。全然まとまらないんです。まだまだ、本当に分からない中で、第5回目で何とか形ができてくれればいいのかというところで、本当に今は皆さんのアイデアを、ご意見をもらえればいいのかと思っているんですけども、いかがでしょうか。

○委員 僕も高校のときは自分でお弁当を作ってというようなことをやっていたんですけども、やはり実体験を伴わないと、その経験がないと、やれないというのがすごくあると思うんですね。それは料理に限ったことだけではなくて、様々な学びについてだと思いますし、僕が子どもたちに、こまやけん玉を教えている中で、僕個人としても、いろいろ子どもたちから学ぶところもあったし、子どもの頃に物理の法則、遠心力だったり、こまが回っているときに回る軸が一定固定されているけれども、それが少しずつ右回転して行って、それは地球の地軸によって、地球の自転によって影響されているものだというのを後から聞いたりとか。実体験を通した経験というのが、後々の学問や学業にもすごく生きてくるなというのがあって、そういう昔遊び、手足を使う遊びというのを子どもたちに広げたいなと思っているんですね。ですので、教育の場でも、そういう実体験を通した学びが、そういった機会がたくさんあるといいなと改めて思いました。

○部会長 ありがとうございます。

ほかの委員の方、よろしいですか。

(なし)

○部会長 はい。ありがとうございます。本日も各委員の方々から多くのご意見を頂きました。本日の議論の内容は様式2-2にまとめて、次回の部会で配付できるように、事務局は大変なんですけど、よろしく対応をお願いします。

それでは、最後に今後のスケジュールなど、事務連絡等がありますので、事務局から説明をお願いしたいと思います。

○教育委員会事務局次長 はい。本日は、少し時間もオーバーしていただきながら、長時間ご審議いただき、本当にありがとうございました。私もいろいろ、キーワードとかご発言の内容を書き留めましたけど、本当にいろんな発想とか、切り口、頂いたと思います。

これを、まとめていくのはやはり大変だと思いますけども、学びやあるいは学校というキーワードとか、いろいろなことが、今日のこの時間では言い尽くせない発想やご提案が、まだまだたくさんあるのかなと思っています。本当にありがとうございました。

そういう意味では、この学びについては、先ほど私も言いましたけど、いろんなものに通底する概念でもありますので、またこの場でなくても、今日言い忘れてしまったとか、後からこんな発想が思いついたとかということがあれば、途中でも結構ですし、また次回の審議会において、ぜひご意見を頂ければと思います。

次回の日程ですけれども、1週間後になります。12月21日月曜日18時から、場所は本日

と同じ第3・第4委員会室で開催いたします。本部会の最終回ということになりますので、これまでの審議の総括を行っていただくご予定でございます。よろしく願いいたします。以上でございます。

○部会長 はい。ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、本日の審議会の議事は全て終了いたしました。円滑な議事進行と、長時間にわたり多くの意見を出していただいたことなど、ご協力いただきまして、誠にありがとうございました。本日はこれにて散会といたします。お疲れさまでした。ありがとうございました。